防衛大学校本科第２８期学生及び理工学研究科第２１期学生卒業式における学校長式辞（昭和５９年３月１８日）

第4代学校長　土田　國保

防衛大学校本科第２８期及び理工学研究科第２１期の学生諸君は、本日をもって所定の教育訓練並びに研究の全課程を終了し、４年あるいは２年の小原台生活に別れを告げることになりました。ここに卒業式を挙行するに当たり、卒業生諸君に対し、まず心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄ある式典に、国務御多端の折柄、御臨席を賜りました中曽根内閣総理大臣[注(1)]、栗原防衛庁長官[注(2)]をはじめ、木村参議院議長[注(3)]、国会議員の諸先生ほか内外多数の来賓各位に対し、心から厚くお礼申し上げます。また、卒業に至るまでの間、歴代の防衛関係機関の幹部各位、官民の諸機関、更には有志の皆様方、並びに在日米軍、各国大使館付武官の方々からいただきました御指導、御協力に対しましても、併せて厚くお礼申し上げる次第であります。また、本校において学術教育の任に当たられました教授・助教授・講師・助手の各教官、日夜をわかたずひたむきに訓練補導に全力を傾注され、あるいはまた、縁の下の力持ちとなって各般の校務に精励せられた自衛官及び職員各位に対しましても、学校長として深甚なる感謝と敬意を表するものであります。更にはまた、遠路をも省みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、今日までの御援助に深く感謝申し上げますとともに、ここに御子弟の成業を心からお祝い申し上げる次第であります。

４５５名の本科学生諸君、省みれば昭和５５年の春４月、雨上がりの空模様の中を、中講堂で最初に迎えた時のことは、今も思い出を新たに

注(1)　中曽根康弘

注(2)　栗原祐幸

注(3)　木村睦男

するところであります。それからの４年間、私は諸君とともに過ごしてまいりました。諸君は学業に励み、訓練その他の数多くの厳しい試練に耐え、逞ましい成長を遂げ、栄えある今日を迎えることが出来たのであります。

シンガポール共和国、タイ王国の４名の卒業生諸君にも、心からなる祝福を送るものであります。

さて諸君の自衛隊幹部としての修行は、いよいよこれからが本番となります。本校在校中、諸君は日常生活のあらゆる面において、多くの指導を受けてこられました。これから各幹部候補生学校に入って、陸・海・空それぞれ特色のあるオフィサーとしての素養を、自らの体験と反省によって我がものとしなければならないのであります。

何と言っても大切なのは、第一に自己への厳しさ、第二にはモティヴェーションの純粋さ、そして第三には複眼的な批判力と、それらに裏づけられた愚直なる実行力なのであります。

自己への厳しさとは何か、それは己れの弱さとの妥協や自己弁護に対する鋭い反省であります。士官道の第一は、人が見ていようといまいと、人から言われようと言われまいと、己れに付与された職責を、自らの責任において完遂する献身にあります。

モティヴェーションの純粋さとは何か、それは愧（はじる）ということに対して敏感であること、心のけがれを拒否する潔白感であります。人生とは、要するにうまくやればいいというものではないのであります。良かれと念じたことが裏目に出たり、善意が報われないからといって、自らの姿勢を崩してはならないのです。失敗も挫折も、対処する心の持ち方によって、人間性に幅と深みを与え、将来の飛躍のバネとなる力も、その中から出てくることを、私は信じて疑いません。

複眼的な批判力とは何か、それは物の見方、考え方について、常に素直であることを心掛け、静かにして絶え間なく己れの頭脳を磨いてゆくことによって培われる実力であります。

そして実行力とはなにか、諸君は、この小原台で他の大学生にひけを取らない学力、体力、適応力を磨いただけでありましょうか。決してそれだけではない筈であります。自己の利益は二の次にして、この尊い祖国日本をいかに守るかを念頭に置き、心身を捧げてゆくという、愚直な人間としての生き方を学んだのではないでしょうか。それこそが実行力であります。

たとえその道がいかに厳しくとも、それが己れの内心の支えであり、

心の仕合わせであり、日本人としての生き甲斐であるという人生観を学んだ筈ではないでしょうか。それなるがゆえに、私は諸君を尊敬し、諸君一人一人に限りなき愛情を注ぎつつ、その大成を祈ってやまないのであります。

次に理工学研究科５７名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。

諸君は、幹部自衛官として必要な資質の涵養、なかんずくそれぞれの分野における高度の専門的知識技能を修得すべく、２年の歳月を本校において過ごされたのであります。諸君の同僚の多くは、それぞれの多忙な第一線勤務に挺身しているわけでありますが、大学を卒業して数年を経てから､諸君のようにいま一度研学の門をくぐり、大学時代の基礎を再確認しつつ、その上に立ってそれぞれの専攻を通じて頭脳の充電を図り、将来の飛躍と大成のポテンシャルを培う機会を得たことは、真に有意義であり、２年間の第一線勤務の空白を補ってあまりあるものと考えるのであります。今後諸君は、それぞれ新たな任務に挺身せられるのでありますが、更に研鑽に努められ、その実力を伸張させつつ、ますます重要となりつつある自衛隊の科学技術分野の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

思い出の小原台生活の幕は、今まさに閉じようとしつつあります。これから先、同期生同志、その融和と団結を更に強め、いかなる部署、そしていかなる境涯にあっても、防大出身者としての誇りをもって、お互いに手を取り助け合いつつ、末永く祖国日本の輝かしい将来のために挺身してゆかれんことを、お別れに当たり、心から祈念しつつ、ここに式辞を終わるものであります。